

東京バッハ合唱団 月報

[第 578 号] 2010 年 8 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.578
August 2010

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 104 回定期演奏会を聴いて

魂の語りかけ

高梨 公明 (団友、春秋社編集部)

先般、東京バッハ合唱団の定期公演を聴かせていただいた (2010 年 6 月 6 日)。練習の成果が存分に発揮された快演だった。歌い手たちの日本語による歌い込みがストレートに伝わってきて、感銘を受けた。まさに母語による語りかけの妙というべきか。コントラバスの名手溝入敬三さんの姿もあって、バッハならではの通奏低音の推進力が鮮やかに迫ってきた。

かねてより日本語上演については、バッハに限らずオペラなどでも大いに共感をもって見守りつつ、積極的にその意義を汲み取ってきたが、今回、これはもはや「試み」という領域を超え、音楽にとってごく自然のありかたではないかと改めて感じた次第である。

もとより、バッハ音楽のすばらしさ、奥の深さは、はかりしれないものがあり、それゆえ限りなく人をひきつけてやまない。バッハの語りかけは、常に新鮮なものがある。

バッハの魅力を語る際によく言われる言葉に「普遍性」というのがある。しかし、こう言ったとたんに、偏

狭な文化観に囚われているという誹りをまぬがれないが、ここで言いたいのは、すべてを超絶した音楽のありようのことだ。そこには原語主義という見方やオリジナルの発想というようなものは介在してこない。本来の音楽の素晴らしさだけがそこにある。日本語でカンタータをうたう意義もここに出てくる。ここにはもはや違和感などはない。まさしく音楽だけが屹立してくる。私たち聴衆の耳にはじつにバッハ精神だけがそこに育まれていくのではないだろうか。

プログラムの予告によると、来年には「口短調ミサ曲」をてがけるという。教会音楽家たるバッハの畢生の大作。ルター派の教会音楽をうちやぶり、カトリック教会への橋渡しをする音楽のスケールは圧倒的だ。これこそ、バッハの真の意味での普遍性志向にほかならない。深い信仰の音楽は、キリスト教を超える。言語を超える。祈りの音楽の普遍性がここにある。

来年の「口短調ミサ曲」を楽しみにして待とう。

南 吉衛 牧師のドイツ宣教報告書

昨夏のヨーロッパ演奏旅行の際、シュトゥットガルトでの 2 つのコンサートの開催に向けてご尽力くださったのが、南吉衛先生でした。

シュトゥットガルト市を州都とするドイツ南西部のヴュルテンベルク州教会で奉職されていた南先生は、本年 3 月に帰国され、現在は、日本基督教団桑名教会に牧師として赴任されていますが、このほど、ドイツでの 3 年間のお働きの報告書『ドイツに遣わされて 2007 ~ 2010 宣教報告』を発行されました。

この中で、東京バッハ合唱団の演奏会についても触れられています。

わたしの知る限り、わたしを招いてくれたヴュルテンベルク州教会の中には、日本の教会、あるいは地域と正式の交わりを持っている教会は存在しません。一般的な風潮は、「日本の教会と何が出来るのだ

ろうか。日本は豊かな国であり、発展途上国ではなく、地理的にもドイツから最も遠い国」というものです。

ドイツの教会の日本に対する関心の薄さを述べましたが、忘れてならないことは、2009 年の夏、「東京バッハ合唱団」をシュトゥットガルトに招き、パウロ教会と「奉仕女の家」でコンサートを行ったことです。この企画は、パウロ教会と奉仕女の家の方々の寛大な親切によって盛大な成果をもたらしました。合唱団の皆さんは、大きな喜びと感動を胸に帰国されました。団員お一人お一人にとって生涯忘れることのできないことでしょう。バッハ合唱団のコンサートは、今もパウロ教会で話題になっており、わたしの 2010 年 3 月 14 日の「送別礼拝」には、パウロ教会聖歌隊のメンバー 50 人が合唱の奉仕をしてくれました。(p.2-3)

宣教報告(冊子・24 頁)をご希望の方がいましたら、合唱団事務局にお申し出ください。

バッハ・カンタータの“名曲”とは？

- 第 105 回定期演奏会によせて -

大村 恵美子

200 曲ちかく残っているバッハのカンタータのうち、名曲と見なされるのは、一般に何曲ぐらいあるのか？ こういう考えは愚問といえるでしょう。すこしカンタータに分け入ってみると、その一作一作が、じつに奥深い内容に満たされ、他の追隨をゆるさない表現力と構造をそなえていて、それがあまり話題となっていないのは、多くの人に知られていない、ただそれだけのことだと気づくからです。個人的なご縁から、ひとつの作品をなんども経験することがあると、どうしてこれが見過ごされているのか、不公平ではないか、と言いたくなってきます。

東京バッハ合唱団が半世紀ちかくカンタータ演奏をつづけてきて、まだ演奏せずに残っているのは、現在 60 曲ほどですが、これらは主として、合唱の出番が少ないという理由からのものが多く、合唱は最終コラールだけとか、全篇独唱曲だけとかなのですが、それでもこの合唱団では、合唱がまったく含まれないものも、積極的にプログラムのなかに入れていくほうだと思います。

私が言いたいのは、バッハの全カンタータには、バッハが手を抜いた駄作というものはなく、名作と言われていないものは、単に演奏される機会が少なく、一般に知られていないだけだということです。でも今は、なん通りもの録音全集が世にでて、時間をかけてその全作品に接するひとびとが飛躍的にふえているはずで、どんどんポピュラーの程度も変わってくることでしょう。

最近の演奏例から

早い話が、「50 曲選」を企画したとき、これを抜かずわけにゆかないとの思いがあったので、これらの 50 曲はすなわち名曲、と断じてよいと思います。ただし、合唱を重んじた傾向も、あることは争えませんが、このなかに入れないのは忍びない、と最後までひっかかったものも数多くありました。たとえば、どの面から考えても入るべきだった BWV 31《天は笑い 地はどよめく》(イースター用)、また合唱のない、バス独唱用の BWV 82《われ 足れり》。あげればきりがありません。

ごく最近(2010.6.6)歌った BWV 4 は、名曲中の名曲で、毎年歌いたいほどですが、そうはゆかないと自制して、とりあげる間隔をおいている。ポピュラー度も、あるいはナンバーワンかもしれません。ポピュラーというと、いくぶん軽い意味も加わりますが、これは全然そんなこともなく、バッハの真髓として、名実ともに抜群の宝にちがひありません。

また、昨夏(2009.8)ドイツで歌った BWV 8 は、い

第 105 回定期演奏会 予告

バッハ教会カンタータ名作選

[日時] 2011 年 1 月 9 日(日) 14:00 開演

[会場] 石橋メモリアルホール

BWV 111 (み心は つねに成し遂げらる)

BWV 68 (み神はこの世を かく愛したまえり)

BWV 147 (心と 日々のわざもて)

モテット BWV 230 (頌めよ主を 世の民こそりて)

ソプラノ: 光野孝子

アルト: 佐々木まり子

テノール: 鏡 貴之

バス: 新見準平

管弦楽: 東京カンタータ室内管弦楽団

オルガン: 草間美也子

合唱: 東京バッハ合唱団

指揮: 大村恵美子

[入場料] 前売り 3000 円(当日売り 3500 円)

[入場券取り扱い] 東京バッハ合唱団事務局

[発売開始] 2010 年 9 月 1 日(予定)

ちばん好き、と個人的に評価する人の多い曲です。同じ機会の BWV 131 も名曲として広く知られています。

しばらくご無沙汰してはいますが、待降節の直前の BWV 140《目覚めよと呼ばわる ものみの声高し》、待降節の BWV 61《いざ来たりませ 世の救い主》、降誕節の BWV 110《喜び 笑い あふれ》等々、教会暦上の大きな祝日にそったカンタータもポピュラー度の高いものばかりです。

葬送用の BWV 106《神の時は いとも正し》など、バッハが青年だった初期に作った数曲は、合唱も多く、そのほとんどが愛好曲として含まれているのが目立ちます。また、コラールがとくに有名で、それに基づいて出来あがったコラール・カンタータも、よく愛されています。BWV 1《あしたに輝く 妙なる星よ》(ニコライ作の同名コラール)、BWV 80《かたき皆ぞ わが主は》(ルター作同名コラール)、BWV 100(98, 99)《神の御業こそ ことごと善けれ》(ロディガスト作同名コラール)、BWV 137《頌めよ主を 強き栄えの君を》(ネアンダー作同名コラール)等々。

これらはいずれも、団の初期から最近にいたるまで、くりかえしとり上げてきた、まさに名曲そのものと言えましょう。

105 定演のカンタータ 3 曲

次回の定期演奏会(2011.1.9)では、コンサートの表題そのものを、カンタータ名曲選とでもしようと思っ

いるところですが、まずは異論のないところでしょう。

BWV 111 (み心は つねに成し遂げらる)

これは、有名なコラール(ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト作)に基づいたコラール・カンタータの一例で、神に対する揺るぎない信頼をあらわすこのタイトルが、作品全体の内容となっています。前出の BWV 98, 99, 100 と同じような、神への信頼をおおらかに歌うコラールですが、前者3曲が長調、こちらが短調である分、前者にくらべて陰影にも富んでいます。あるいはわが国での歌われ方はまだ少ないかも知れません。

BWV 68 (み神は この世をかく愛したまえり)

悲愴美をとまなうこのカンタータは、聖書のなかでもとりわけ有名な句「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネによる福音書 3章 16節)によって、真摯な信仰を深々と歌い、曲の冒頭と終尾をりっぱに盛りあげる2つの大合唱と、その間にふくまれる、緑の季節(ペンテコステ)を満喫させるように、明るくはずむソプラノとバスの2曲のアリア、この両者(合唱と独唱の対比)のすばらしさで、私たちを魅了します。

BWV 147 (心と日々のわざもて)

私は、キリスト教信仰の根幹となるタイトルを帯びたカンタータは、なるべく積極的にとりあげようと努めてきました。BWV 47《おのれを高くする者は低くせられ》、BWV 72《みなすべて み心のままに》、そして、この BWV 147《心と 日々のわざもて》等々がその例です。

歌詞だけ替えて、第1部の終り(第6曲)と第2部の終り(第10曲)に2度くりかえされる、コラールのポピュラー度は年々高まり、いまや携帯の着メロやテレビ・コマーシャルの背景音楽などで、耳にしない日がないほどです。あまりの偏愛に、このカンタータの他の楽曲には耳も貸さないような人もいるほどですが、せっかくのこの機会に、他の部分も忍耐づよく味わってくだされば、大好きなコラールとともに、バッハのより大規模な愛にふれることになるでしょう。

モテット BWV 230 (頌めよ主を 世の民こぞりて)

これらの選りすぐった名カンタータの後に加えられるモテットは、晴れやかに神を讃える普遍的な内容、演奏時間の短さ(約6分)、混声4部の単純さ(他のモテットは5部、6部、8部等)、そして八長調で一貫している点などで、どんな機会にも気軽に演奏可能であり、最後はアレルヤ誦で華やかに盛りあがる等々、いつでもどこでも歓迎される音楽です。ぜひ愛好曲、できれば愛唱曲のなかに加えていただきたいと願っています。



合唱団の少年たちとペーрман先生 (www.freiburger-dommusik.de)

フライブルク大聖堂少年合唱団が来日します

昨年の8月9日、フライブルク大聖堂日曜ミサへの客演は、私たちのヨーロッパ演奏旅行の前半のハイライトでした。

あの美声をもって聖歌をリードされた、大聖堂楽長ボリス・ペーрман先生の率いる少年合唱団の一行が、8月の後半に来日し、各地でコンサートを行います。合唱団の創立40周年記念演奏旅行、3度目の来日だそうです。

東京での公演：

- 8/21(土) 18:30 聖グレゴリオの家(東久留米)
- 8/22(日) 12:00 東京カテドラル(関口)
- 8/22(日) 19:00 原宿教会(日本基督教団、原宿)

以降は、8/25-28 北海道(札幌、函館)、8/29-9/1 関西(大阪、京都、神戸)、9/4-9/5 広島(呉、広島)と巡演する予定です。

私たちの合唱団でも、昨年のご返礼を兼ねて、いずれかのコンサートを聴かせていただきます。8月初旬までには、詳細が把握できているはずです。

《口短調ミサ曲》夏季集中練習

[日時] 本年8月の毎土曜日(全4回、各13:30~17:30)

8/7(土) 8/14(土) 8/21(土) 8/28(土)

[会場] 世田谷中央教会(日本同盟基督教団、東急田園都市線「桜新町」駅下車4分) = 土曜日の練習場

- ・冒頭からの全曲を、4回に分けて集中的に練習します。
- ・8月中の月曜日(目白)の練習は夏季休暇です。
- ・本番公演(合唱団創立50周年記念企画)は、2011年11月の予定です。
- ・公演までに、いくつかのステージを用意しました。いつからでもご参加ください。
- ・詳細はお問い合わせください。

創立 48 周年記念懇親会

7月5日 18時半から、目白聖公会で、恒例の創立記念日のお祝い会が開かれました。創立 50 周年を 2 年後にひかえて、目立たない集いになるかと思いきや、過去数十年のどの年にくらべても、活気のある、すばらしい会となりました。

それは、次回の定演で歌うことになっている、BWV 68 の世界を、さながら現実にみんなで体験したようなひと時でした。BWV 68 が基づいた聖句は、ヨハネ福音書 3: 16, 17 で、前のページの引用と重なるが次のとおり。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」この神と人、人と人との信頼関係が、生きて働くところが天国なのだ、といってもよいでしょう。

当日の参加者は、団員、指揮者とピアニストをふくめて 23 名、お客様 4 名の計 27 名でした。バス団員は、入団後間もない大学生の櫻井龍明さんも加えて、ほぼ全員が勢ぞろい。女声団員（今年の担当はソプラノパート）は、それぞれお得意の、初夏にふさわしいご馳走を用意し、お手製の手芸品や食品、その他のバザー提供品をたずさえて、早くから会場を設定します。後援会員中澤富士子様から、高級品のぎっしり詰まったバザー献品の段ボール箱がとどく。

創立以来、演奏会や催し物には積極的にかけてくださる青木道彦様が、この日もお客様第 1 号。昨年ヨーロッパ演奏旅行でずっと付き添ってくださった添乗員の四方恭子様が、団員といっしょに食事やバザーの準備に立ちはたらいてくださる。ソプラノ団員高濱朗子さんが、アメリカの高校から帰国したばかりという次女萌子（もゆこ）さんに、提供品のキャリーバッグの運搬を手伝ってもらって登場。後援会員の野本哲雄様も、お忙しいお勤め先から、会の半ばに到着。

こうして、ウィークデイの夕の、ほんの 2 時間のうちに、地上の天国が出現しました。それぞれに、各自の近況や合唱団への思いを披露され、当節、他の国々にくらべても、とくに生きにくい社会となっているわが国で、このように人間の根柢の力を支えてくれる、バッハの音楽をめぐって、おたがいに認めあい、求めあい、信じあう仲間とともに過ごすことの至福を、味わいなおしたのです。

根づよい世の中の不況の波を、まともにかぶって、小さなグループの東京バッハ合唱団は、毎回の演奏会に存続をかけて闘っています。昨年の演奏旅行で、精根出しくし、経済的にみれば、ここでバッタリと倒れてしまいかねないほどの正念場に立たされています。

しかし、この日の明るい参加者のみなさんには、そん

な憂いの表情はなく、これからも一緒にやり抜くのだという、たくましい喜びに満たされていました。この世を愛し、永遠のいのちを得るために、ひとりも滅びないよう見守るといふ、神の強い意志をあらわした BWV 68 が、あたかも試練のただ中にあるこの合唱団に与えられたように感じられるのでした。（大村恵美子）



新刊楽譜のご案内

カンタータ第 111 番（み心は つねに成し遂げらる）
„Was mein Gott will, das g'scheh allzeit“ BWV 111

発行：2010 年 7 月 20 日（ISBN978-4-925234-67-2）

定価：本体 1400 円 + 税（A4 判/本文 28 ページ）

後援会員、月報読者の皆様には、本体価格 1400 円（送料とも）でお頒けします。お申し出ください。

< 楽譜 / CD 在庫 >

後援会員、および、当「月報」読者の皆様にかぎり、下記の割引価格でお分けしています。

「バッハ・カンタータ 50 曲選」楽譜（オレンジ色表紙）
・全 50 冊セット.....66,000 円 33,000 円（送料とも）
・各冊.....本体価格の半額（送料とも）

新規シリーズ（レモンイエロー表紙）楽譜（既刊 12 冊）

・各冊.....本体価格のみ（送料とも）

CD「バッハ・カンタータ 50 曲選」

・各巻.....500 円（送料とも）< 品切れがあります >